黒イものは　田舎もの、綿帽子
四角な物は　豆腐の耳
くゝるものは　山ねこ廻しの手
車でする物は　文七元結の尺八の音色

三年ホドハヤル、後御停止ニナル、

ケ様ナル物ハ付ハ、今ハ七八歳ノ小兒モ云兼ズ、時世ノ是カ非カ、

〔嬉遊笑覽三詩歌〕古への謎合をみるに、なぞ何々のものと端書あり、俗にものはといふも是なり、故に寛保のはじめ謎付といひしは、今の物は付なり、

〔嬉遊笑覽三詩歌〕又判じ物といふも卽謎ながら、其内書畫などにて、曉らせたるをいふ、淨瑠璃十二段枕もん野中の清水のたとへとは、ひとり心をすますとや、つゝゐの水の心とは、やるせもなきとの仰かや、尺なし帶のたとへとは、結びかねたとの給ふかや、きのふはけふの物語に、御茶を進上申せ、もみぢにたてゝ參らせよ、こうようたてよと申事ぢや、同物語、ふろやにかう〳〵ふろといふが有、これはいかなるいはれやらんといへば、ふかうにおよばぬ、醒睡笑に、いづれもおなじことなるに、常にたくをば風呂といひ、たてあげの戸なきを、柘榴風呂とはなんぞいふや、かゞみいるとの心なり、

判じ物

判じ物、歌林雜話に、上京に新城の出きし正月に、御門のからゐしきに、われたる蛤貝を九ッならべ置たり、いかなる心ぞしる人なかりしに、信長公さとき御智惠にて、これは公方の御心うつけて、くがいかけたるといふことを、京童が笑ひて、したる物ぞと、さゝやかせ給ひしとなり、○中略

願人坊の、判じ物を、鼠半切を小くきりて、摺たるをもてきて錢を乞ふ、明和二年の川柳點の句に、一つかみやりながらきく判じ物、こは文化の末の頃迄は、多くもてありきしが、其後はおのづか